

向河原遺跡

一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

向河原遺跡

一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

序

向河原遺跡は、甲府盆地西部の山梨県中巨摩郡甲西町に所在し、西に櫛形山を望む滝沢川扇状地に位置しております。本遺跡の発掘調査は、一般国道52号（甲西バイパス）および中部横断自動車道の建設に伴い、平成4年度から5年度の2年間にわたって実施されました。平成4年度の調査では、県内でも例の少ない弥生時代中期後半と考えられる小区画水田跡とそれに関連すると思われる溝跡が発見されました。続く平成5年度の調査では二つの生活面が確認され、上面からは江戸時代のものと考えられる水田跡が、下面からは中世のものと考えられる杭列を伴う水路状の遺構が発見されました。この遺構も水田経営に関連する施設ではないかと思われます。この結果、峠西地域の一つの遺跡で、古代・中世・近世の三つの時代の水田跡およびそれに関連する遺構が発見されたことになりました。この興味深い遺跡の調査結果をまとめたものが本書であります。この報告書が多くの方々の研究の一助になれば幸甚であります。

末筆ながら、種々ご協力を賜りました関係機関各位、地元の方々並びに直接に調査・整理に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡甲西町江原に所在する向河原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、一般国道52号（甲西バイパス）および中部横断自動車道建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が建設省より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
3. 本書の編集は米田明訓が行った。
4. 本報告書に係わる出土品および写真、記録図面等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
5. 自然科学分析については、帝京大学山梨文化財研究所およびパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その分析報告については紙面の都合上すべてを掲載できなかつたところもある。

凡　　例

1. 掲図の縮尺は原則として次の通りである。
全体図-1/400 個別遺構図面-1/120 土器実測図-1/3 木製品-1/2 木杭-1/6
2. 遺構断面図のレベル表示は標高を示している。
3. 同一掲図内の水糸レベルはすべて同一である。

目 次

序	1
例 言	3
第1章 調査の経緯と概要	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 発掘調査の概要	6
第2章 地理的環境	8
第1節 遺跡の立地	8
第2節 周辺の遺跡	8
第3章 層 位	11
第4章 発見された遺構と遺物	12
第1節 1区の遺構と遺物	12
第2節 2区第1面の遺構	15
第3節 2区第2面の遺構と遺物	15
第5章 まとめ	25
第1節 1区の水田跡と造営時期	25
第2節 2区第1面の水田跡と造営時期	25
第3節 2区第2面の遺構と造営時期	26
第6章 自然科学分析	29
第1節 向河原遺跡のテフラ	29
第2節 向河原遺跡1区の古環境と稻作について	31

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	9
第2図 発掘区域図	10
第3図 基本土層概念図	11
第4図 1区全体図	12
第5図 1区水田跡	13
第6図 1区出土土器(1)	14
第7図 1区出土土器(2)	15
第8図 2区第1面水田跡	16
第9図 水田跡排水施設	17
第10図 2区第2面全体図	17

第11図	1号溝状遺構	18
第12図	2~4号溝状遺構	19
第13図	5号溝状遺構	20
第14図	12号溝状遺構	20
第15図	6~11号溝状遺構	21
第16図	2区第2面出土木製品	22
第17図	1号溝状遺構出土木杭(1)	23
第18図	1号溝状遺構出土木杭(2)	24
第19図	1区水田面のレベル差	25
第20図	2区第1面水田面のレベル差	26
第21図	2区第1面水田区画の変遷	27

図版目次

- 図版1 1区水田跡（東から）・1区水田跡（南から）
 図版2 1区水田跡土器出土状態(1)・1区水田跡土器出土状態(2)
 図版3 2区第1面水田跡（北から）・2区第1面水田跡（南から）
 図版4 2区第1面水田跡畦畔とヌルメ
 2区第1面水田跡No.9とNo.12の間
 図版5 2区第1面水田跡No.4とNo.6の間（東から）
 2区第1面水田跡No.4とNo.6の間（北から）
 図版6 2区第1面水田跡No.12とNo.15の間（落ちた畦畔）
 2区第1面水田跡No.15東の水口とヌルメ（南から）
 図版7 2区第1面水田跡畦畔断面（No.6とNo.7の間）・2区第1面作業風景
 図版8 2区第2面遺構群（南西から）・2区第2面1号溝状遺構（南東から）
 図版9 2区第2面1号溝状遺構（北東から）・2区第2面溝状遺構（東から）
 図版10 2区第2面1号溝状遺構断面（西から）
 2区第2面1号溝状遺構断面（東から）
 図版11 2区第2面1号溝状遺構杭列（南から）・2区東断面実測風景
 図版12 1区水田跡出土土器・2区第2面出土木製品

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

一般国道52号は、静岡県清水市から山梨県韮崎市まで、太平洋側と長野・新潟方面を結ぶ重要な幹線道路である。しかし甲府盆地より南側の富士川に沿って進む箇所は、カーブが極めて多い上に高低差も激しい。また降雨量も多いために土砂崩れの危険箇所が数多く存在し、実際に通行止めとなることも少なくはない。そのため片側2車線の広い幅員を有するバイパス道路の建設が計画された。まず中巨摩郡白根町在家塚から南巨摩郡増穂町大門間の全長約8kmにわたる建設工事が着工されることとなり、この区間内の試掘調査を平成元年度から実施して10箇所の遺跡を確認した。この向河原遺跡では、鎌倉時代から室町時代と考えられる杭列が道路建設予定地を東西に横断していることが確認された。このため平成4年度と平成5年度の2年間にわたって発掘調査が実施された。

第2節 調査の概要

(1) 発掘調査の経過

遺跡は東西に走る町道を境に南側を1区(3,400m²×2面)、北側を2区(3,000m²×2面)とし、調査は1区については平成4年9月21日から同年12月23日まで、2区については平成5年4月14日から同年8月31日まで実施した。試掘調査で杭列が検出されたのは2区である。

1区・2区ともに調査前より多量の湧水が予想されていたため、調査区の周囲に長さ5mのシートパイルを打ち込み、その内側に排水路を廻らせ、更に釜場を2個所に設け常に湧水をポンプで排水する体制をとった。

表土の剥ぎ取りについては、遺構面の直上まで重機を利用し、以下は人力で掘り下げた。出土は1区調査時は2区へ、2区調査時は1区へ行った。グリッドの配置は、1区は10m×10m、2区は5m×5mである。

なお、本遺跡の発掘調査は事業者側の希望で、同じ中部横断自動車道・甲西バイパス建設に関連し中巨摩郡若草町に所在する新居道下遺跡の発掘調査を1年間一時中断して実施したものであることを明記しておきたい。

(2) 遺構・遺物の概要

1区では弥生時代中期の水田跡が発見された。遺物は甕形土器とその破片のみである。2区では第1面で近世のものと思われる水田跡が1面検出されたが遺物は皆無であった。第2面からは中世のものと考えられる杭列に挟まれた東西に走る溝状遺構が1条発見され、その南側に接して南北に走る3条の溝状遺構が確認できた。また杭列の北側からも幾条かの溝状遺構が発見されている。2区からは木製品が若干出土している。

(3) 調査機関・協力者等

1区発掘調査（平成4年度）

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 米田明訓（山梨県埋蔵文化財センター・副主査文化財主事）
沢登正仁（山梨県埋蔵文化財センター・主任文化財主事）
発掘作業員 秋山松義・雨宮高文・雨宮みつ枝・石原敬子・井上千恵子・遠藤正美・大法ひろ子・木下和子・功刀とよ子・斎藤玲子・坂井美代子・佐久間春江・沢登郁江・沢登五恵・沢登よね・塩島博夫・嶋田とみ子・嶋津志づ枝・嶋津忠義・田中市平・田中親之・塚田ひろ子・時田わか・中込ともゑ・中込久子・中込二三子・二宮明雄・花輪壽枝・花輪操・原伊津子・望月祐子
協力機関 甲西町教育委員会

2区発掘調査（平成5年度）

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 米田明訓（山梨県埋蔵文化財センター・副主査文化財主事）
高野政文（山梨県埋蔵文化財センター・副主査文化財主事）
発掘作業員 秋山松義・有泉誠子・雨宮みつ枝・石原敬子・井上千恵子・井上登・遠藤正美・大法ひろ子・大法正悟・大法晋吾・小野一光・小野良治・木下和子・木下菊江・功刀とよ子・功刀正彦・斎藤玲子・坂井美代子・佐久間春江・佐久間等・沢登五恵・沢登よね・塩沢由樹子・嶋津志づ枝・嶋津忠義・志村住子・志村むつみ・住吉敏夫・田中市平・塚田ひろ子・塚田隆宏・都築いつみ・時田わか・中込真太郎・中込ともゑ・中込久子・中込二三子・二宮明雄・花輪壽枝・花輪操・原伊津子・深沢晴雄・藤田かおり・北條貴人・望月祐子
協力機関 甲西町教育委員会

整理作業（平成8年度）

整理員 遠藤正美・大法ひろ子・風間郁子・河野節子・斎藤玲子・坂井美代子・志村むつみ・都築いつみ・中込久子・中込二三子・望月祐子

第2章 地理的環境

第1節 遺跡の立地

向河原遺跡は、山梨県中巨摩郡甲西町江原に位置する。本遺跡は、甲府盆地の西縁を南北に走る国道52号の東側にあり、西方には櫛形山などを前衛として北岳が主峰の白峰三山や鳳凰三山などの南アルプスの山塊を仰ぎ見ることができる。標高は260mを測る。

南アルプスの唐松峠・ドノコヤ峠付近を源とする御勅使川が形成する扇状地は、県の陝西地域の北部を飲み込み、南は本遺跡が所在する甲西町江原を経て更に南の甲西町田島にまで達している。この扇状地は国内でも屈指の巨大な扇状地である。扇状地には小河川が数多く南東方向に扇状地堆積物を運んでおり、いわゆる複合扇状地を形成している。これらの小河川の中で甲西町地内を流れるものの代表として滝沢川があげられる。滝沢川は遺跡から北西方向の市ノ瀬台地上部を源として櫛形町小笠原付近を扇頂部とする小扇状地を形成し、釜無川氾濫源に向かって平均約20°の急勾配で高度を下げながら盆地床付近で典型的な天井川地形を造り出している。この地域は陝西地域の中でも比較的湧水帯が数多く存在し、古くから水田經營が行われてきた。しかし近年では水田も果樹栽培に転換がなされて、その面積も徐々に減少しつつある。

第2節 周辺の遺跡

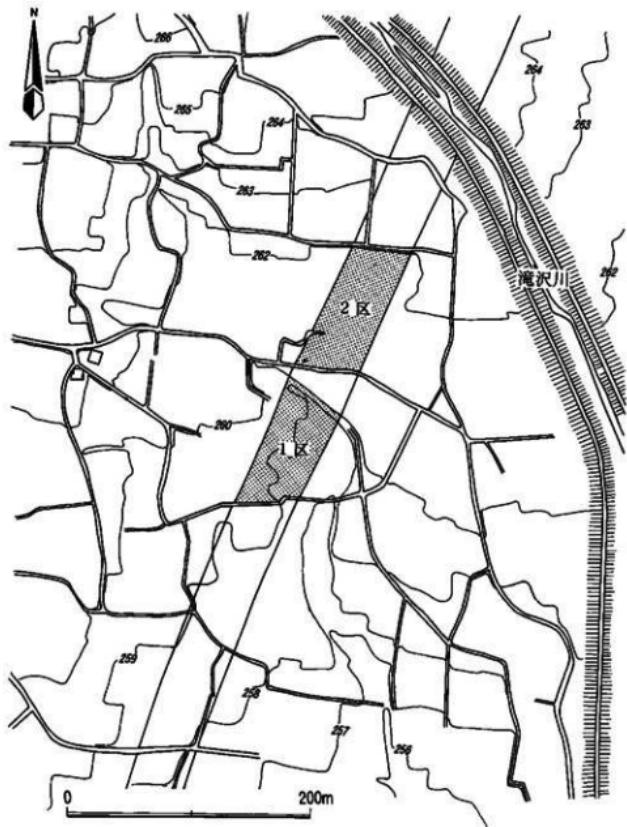
甲西町地内では、今までに遺構の正確な全体像を把握できるような規模の発掘調査は実施されたことはない。甲西バイパス関連の発掘調査が開始されたことによって徐々にまとまった資料が蓄積されるようになった。時代別の遺跡分布の状況は、甲西町の北に接してすでに詳細な分布調査が実施されている櫛形町と同じ傾向が見られる。旧石器時代の遺跡については明確なもののはば握られていないが、縄文時代になると西部の丘陵地帯や山地の傾斜面の所々に見られる平坦地に集落遺跡が営まれている。これに対して弥生時代になると扇状地上や氾濫原に接する湧水地域に集落が展開するようになる。この傾向は以後の時代も長く続くようであり、甲西バイパスに接する遺跡群は、まさにこのような湧水地域に展開しているものである(第1図)。

- 1 七ッ打C遺跡（近世、溝跡：甲西バイパス関連）
- 2 十五所遺跡Ⅰ・Ⅱ区（弥生・古墳・住居跡・方形周溝墓等：甲西バイパス関連）
- 3 十五所遺跡Ⅲ・Ⅳ区（弥生・古墳・平安・住居跡・方形周溝墓等：甲西バイパス関連）
- 4 村前東遺跡Ⅱ・Ⅴ区（弥生・古墳・平安・住居跡等：甲西バイパス関連）
- 5 村前東遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区（弥生・古墳・平安・住居跡・水田跡・掘立柱建物跡等
：甲西バイパス関連）
- 6 新居道下遺跡（古墳・奈良・平安・住居跡・柵列跡・掘立柱建物跡・溝跡等
：甲西バイパス関連）
- 7 二本柳遺跡（中世、水田跡・墓跡：甲西バイパス関連）
- 8 向河原遺跡
- 9 油田遺跡（弥生・古墳・平安・祭祀場跡・水田跡等：甲西バイパス関連）
- 10 中川田遺跡（弥生・古墳・平安・中近世・水田跡・溝跡：甲西バイパス関連）



第1図 周辺遺跡分布図 ($S=1/40000$)

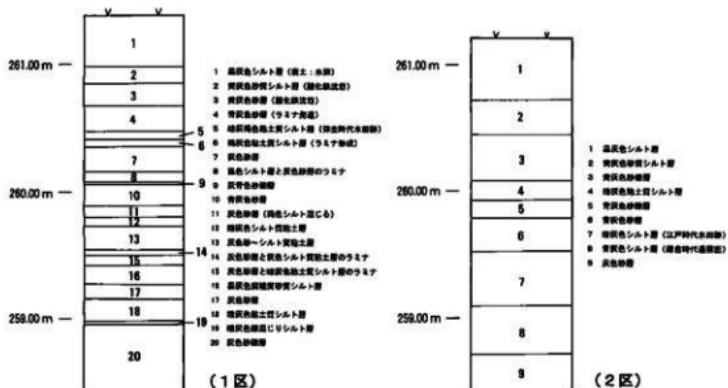
- 11 住吉遺跡（弥生時代、方形周溝墓？）
- 12 大師東丹保遺跡（弥生・古墳・中世・水田跡・円墳・建物跡・水路跡・杭列跡等
：甲西バイパス関連）
- 13 宮沢中村遺跡（中世・近世・近代・民家跡・寺跡・水田跡等：甲西バイパス関連）
- 14 鑄物師屋遺跡（縄文・住居跡）
- 15 メ木遺跡（縄文・奈良・平安・住居跡・掘立柱建物跡等）
- 16 六科丘遺跡（旧石器・古墳・円墳・住居跡・土坑・集石遺構）
- 17 長田口遺跡（旧石器・縄文・弥生・古墳・中世・住居跡・土坑・集石遺構等）
- 18 上の山遺跡（縄文）
- 19 上ノ東遺跡（縄文・弥生・住居跡等）
- 20 昼喰場遺跡（縄文）
- 21 御前山遺跡（弥生）
- 22 土居平遺跡（縄文・住居跡？）



第2図 発掘区域図 ($S=1/4000$)

第3章 層位

向河原遺跡の1区と2区では、それぞれの区では全体として安定した層位を示している。1区についての基本層序は発掘区西側断面の中央部分、2区については発掘区東側断面の中央部分を使用した(第3図)。ところで向河原遺跡では1区と2区で、その土層が全く異なっている。1区では全体的に、砂層やシルト層それぞれについて織状のラミナの形成が顕著であるが、2区では全く見られない。しかし最も大きな差は時期的な差異であろう。1区と2区は共に地表から40~50cmの厚さで現在の水田層(黒灰色シルト層)が見られることまでは同じ状況であるが、1区では地表から約90cmの深さで弥生時代中期の水田面に到達する。それに対して2区は地表から約110cmの深さで近世(江戸時代)の水田面に達し、更に地表から約210cmの深さで中世の遺構面に達する。この層位の変化は、距離にしてわずか30mの間で生じているわけであるが、この間については発掘調査を実施できなかったために、状況は明確には把握できなかつた。おそらくは現在遺跡のすぐ北側を流れる滝沢川の流路の変化に起因するものと思われる。なお1区調査区のほぼ中央で、上記の層序の堆積を大きく破壊している疊層が確認された。この疊層は調査区を東西に横断しているが、これは明治34年の滝沢川の氾濫によるものではないかと思われる。



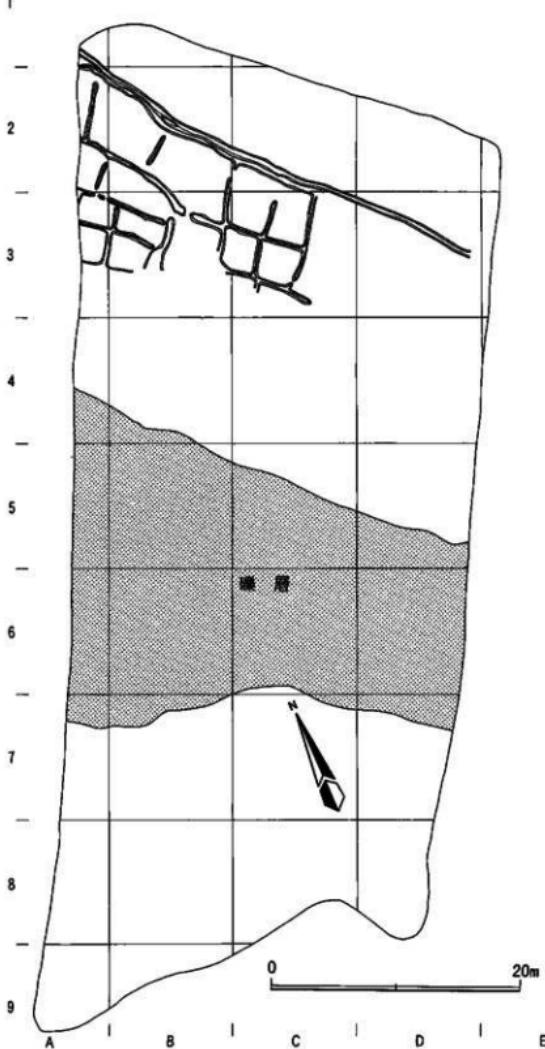
第3図 基本土層概念図

第4章 発見された遺構と遺物

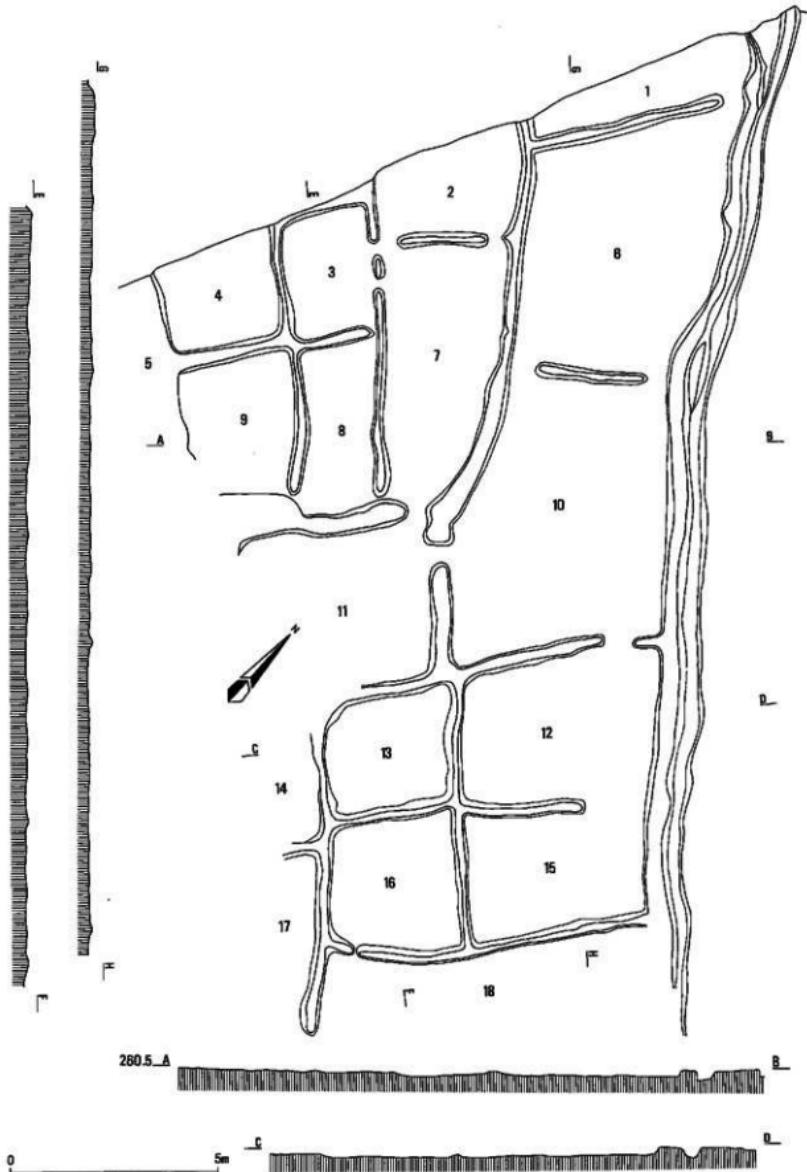
第1節 1区の遺構と遺物

(1) 水田跡 (第4・5図)

1区では弥生時代中期後半のもとのと考えられる水田跡が発見された。遺構の内容は、畦畔・土手状遺構・溝状遺構である。1区の最も北側には西から東に走る溝状遺構が存在する。幅は約40~50cm、深さは約30cmほどであるが東に進むに従って徐々に浅くなり途中で消失する。深さはなくなるものの溝底面のわずかな痕跡は更に東へと伸びていた。溝状遺構の底面近くには砂の堆積が見られ、おそらく水路として使用されていたと考えられる。この溝状遺構の南側に沿って土手状遺構が走る。断面の形状は台形であり上面は平坦である。これは水田跡の畦畔と比較すると造りもしっかりしている上に規模も若干大きいため、それらとは性格が少し異なるものと思われる。機能的には溝状遺構を流れていたであろう水を水田跡に流入させないためのものであったと推測される。この土手状遺構も東に進むに従い徐々に低くなり溝状遺構が深さを失う所で同じく消失する。水田跡の畦畔は調査区域の北側、地表面より約1m下の暗灰褐色粘土質シルト層で確認され、約40m×40mの範囲に広がっている。畦畔の幅は約30cm、高さは約15cmほどが普通であり、断面形は蒲鉾形で上面は平坦ではない。その畦畔によって囲まれた水田跡は大小さまざまな不整四角形で形成



第4図 1区全体図 ($S=1/400$)



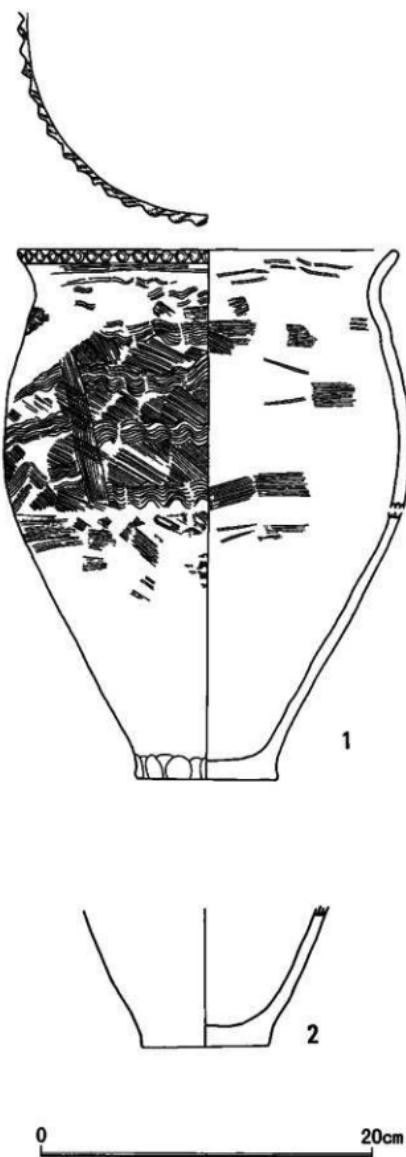
第5図 1区水田跡 ($S=1/120$)

されているが、確認されたものの中で最大の区画は面積が約23m²、最小のものが約6m²であった。各区画の水田面はほぼ水平である。ただし、全体的に畦畔の遺存状態は良好ではないために、最大区画のものに関しても、当初は更に区画が細かく為されていた可能性は否定できない。また、畦畔は東側で前記の溝状遺構と土手状遺構が消失する個所でそれらと同じように不明瞭になってしまう。南西方向でも不明瞭な状態を示すが、こちらは徐々にレベルが上がりながらも畦畔が消えてしまっている。確認された水田跡は更に規模の大きな水田遺構の中の一部であると考えられる。現況を見ても北西方向に水田跡が広がっているであろうことは明白である。それぞれの区画についてNa1～Na18までの番号を付けた。形のほぼ全容が把握できる区画の中で、Na10が最大のもので、Na3が最小のものである。最もレベルが高いのはNa5とNa1であり、逆に最も低いのはNa15とNa18である。このレベル差の詳細については後述する。

(2) 出土遺物

調査区の北隅から弥生時代の變形土器が出土している（第6図1）。破片が細かく散乱した状態で確認されたが同一個体のものであった。溝状遺構より北側の範囲に集中して出土している。口径は23cm（推定）、器高は31cmを測る。口縁部には指頭の押圧による文様が連続して巡らされる。口唇部には繩文もしくは櫛齒状施文具による擬似繩文が施されている。表面は灰黒褐色を呈し全面に斜方向に刷毛調整をおこなった後、胴部下半は刷毛目が消えるまで範磨きされている。胴部上半は刷毛目の上から刷毛目を施したものと同じ施文具で波状文を横方向に巡らせているが、間隔は疎らである。内面は灰黄褐色を呈し、全面に横方向の刷毛調整が為されていたと思われるが、大部分は範磨きによって消されている。底面の直上には指頭による調整痕が見られる。胎土には小石や粗い砂などは見られないものの、焼成は良好とはいえない。

他に弥生時代の變形土器底部と破片が水田面上から散らばって出土している。第6図2は黒



第6図 1区出土土器(1) (S=1/3)

褐色を呈する甕形土器の底部である。1の土器より焼成もしっかりしており胎土も緻密である。第7図はすべて甕形土器の体部の破片である。条痕文(1・3・4)や櫛描文(2・5)がみられる。いずれも内面には明確な調整痕は確認できない。

第2節 2区第1面の遺構(第8図)

2区の第1面では近世のものと思われる水田跡が発見された。遺構の内容は畦畔・溝状遺構である。地表から約110cm下の暗灰色シルト層に造られている。この水田跡は1枚の田の大きさが最小のもので20m×15m、最大のもので20m×25mを更に上回る規模で、かなり大きな区画である。畦畔はしっかりと造られており断面の形状は台形で上面は平坦である。幅が40cm前後もあり人が歩行することも十分に可能である。それぞれの区画にNo.1～No.16までの番号を付した。区画の全体像がほぼわかるものの中で最も小さな区画はNo.4である。逆に最も広い区画はNo.6・No.7・No.9・No.12などがあてられると思うが、すべて調査区域の幅よりも東西に広い区画であるためその全容は不明である。各区画のレベル差の詳細については後に記すが、最も高い区画はNo.16で最も低い区画がNo.1とNo.2である。その高低差はおよそ120cmを測る。南よりも北が高く、西よりも東が高い。

なおNo.9の東辺と北辺東側・No.10の北辺・No.12の東辺およびNo.14の北辺には畦畔に沿って「ヌルメ」と思われる溝が掘られている。掘り出した土はそのまま畦畔とは反対の方向に積み低い土手状の盛り土としている(図版4上)。またNo.6・No.7・No.9・No.12の4つの区画については、南北に走る細い溝状遺構が一直線に貫いている。この溝状遺構の線上ではNo.9とNo.12の間については畦畔が切れており、その他については畦畔にトンネル状の穴が掘られている。これは田から水を落とす際の排水用の溝であると思われる。第9図はNo.4とNo.6間の畦畔のトンネル状の施設であるが、人為的なか自然にならぬか、穴に自然木と思われる木々が突き刺さっていた。部分的に粘土質の土で固められていたような状況が見られたので人為的に穴を塞いだ可能性が強いと思われる。

またNo.12とNo.15の間の畦畔の一部が南側にずれ落ちているが、これは滝沢川の氾濫時に激しい水流により畦畔が破壊されたものであろう(図版6上)。当然この畦畔が破壊された時をもって、この水田跡は埋没・廃棄されたものと考えられる。なおこの水田跡では遺物は検出されなかった。

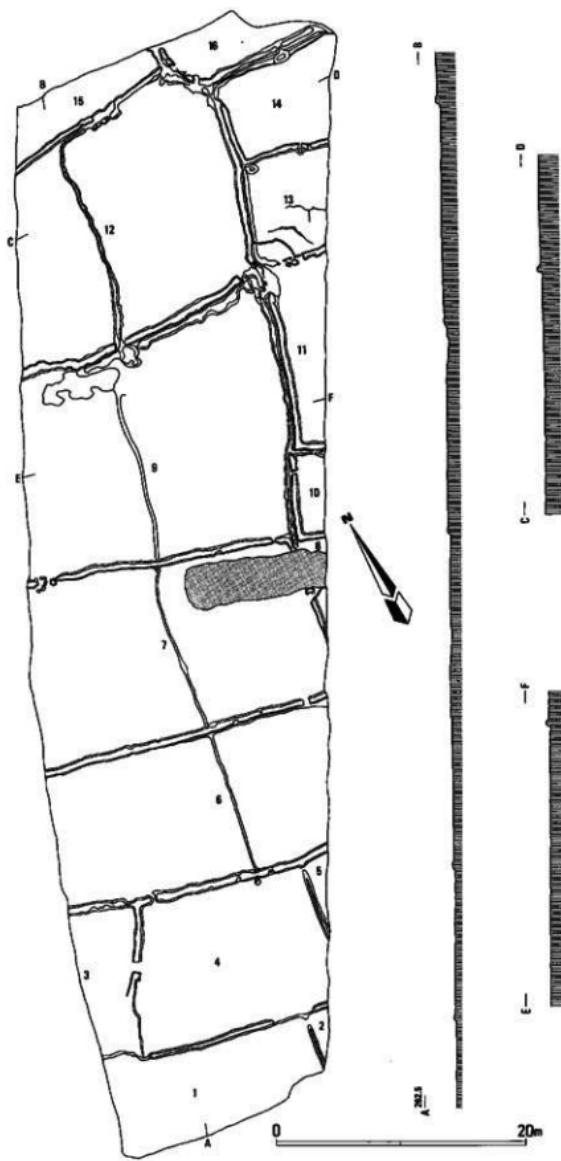
第3節 2区第2面の遺構と遺物

(1) 1号溝状遺構(第10・11図)

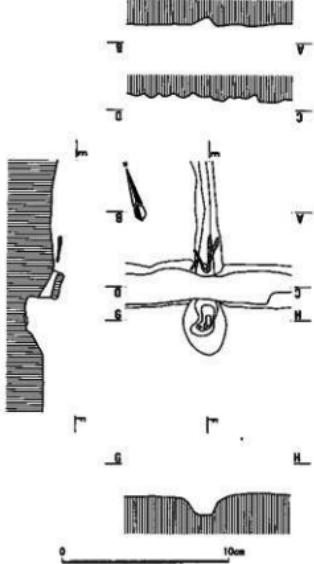
第1面より下へ約70cm、地表から約2mの深さの青灰色シルト層の上面で、杭列を伴う溝状遺構が調査区を東西に横断して発見された。杭列によって挟まれた範囲が溝として活用されていたと思われる。幅は約40cmほどで一定である。この明瞭な杭列のすぐ南側に並行して更に古



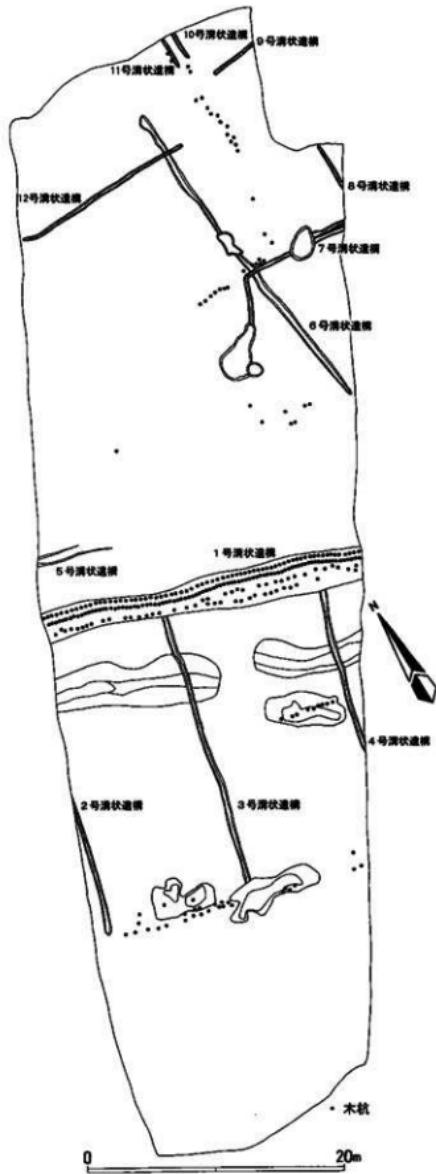
第7図 1区出土土器(2)(S=1/3)



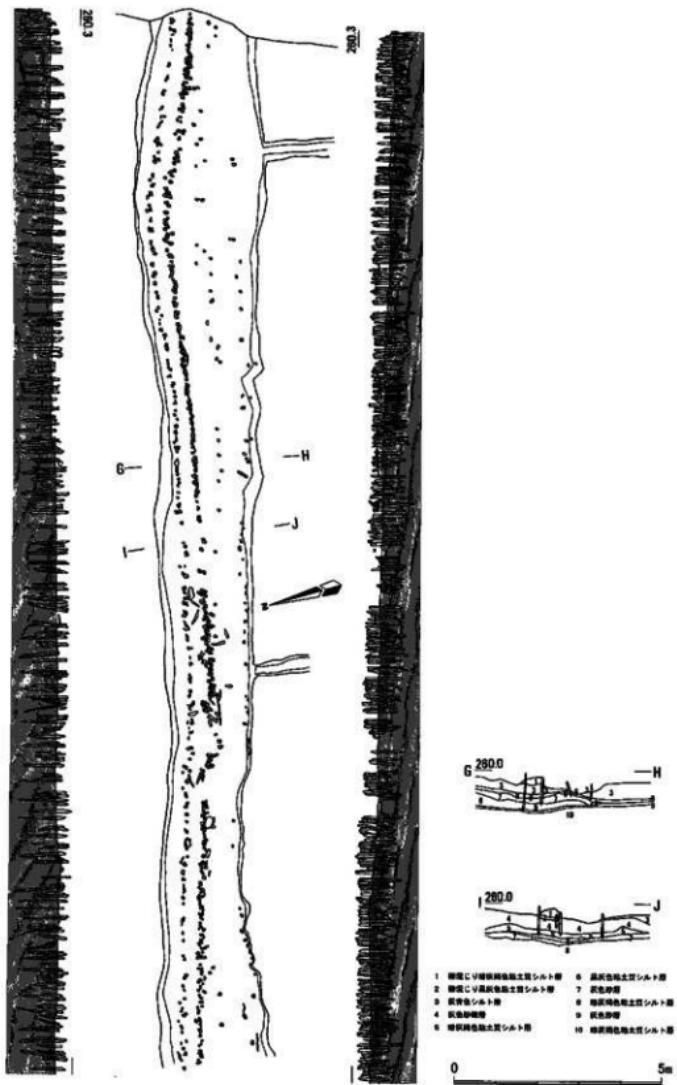
第8図 2区第1面水田跡 ($S=1/400$)



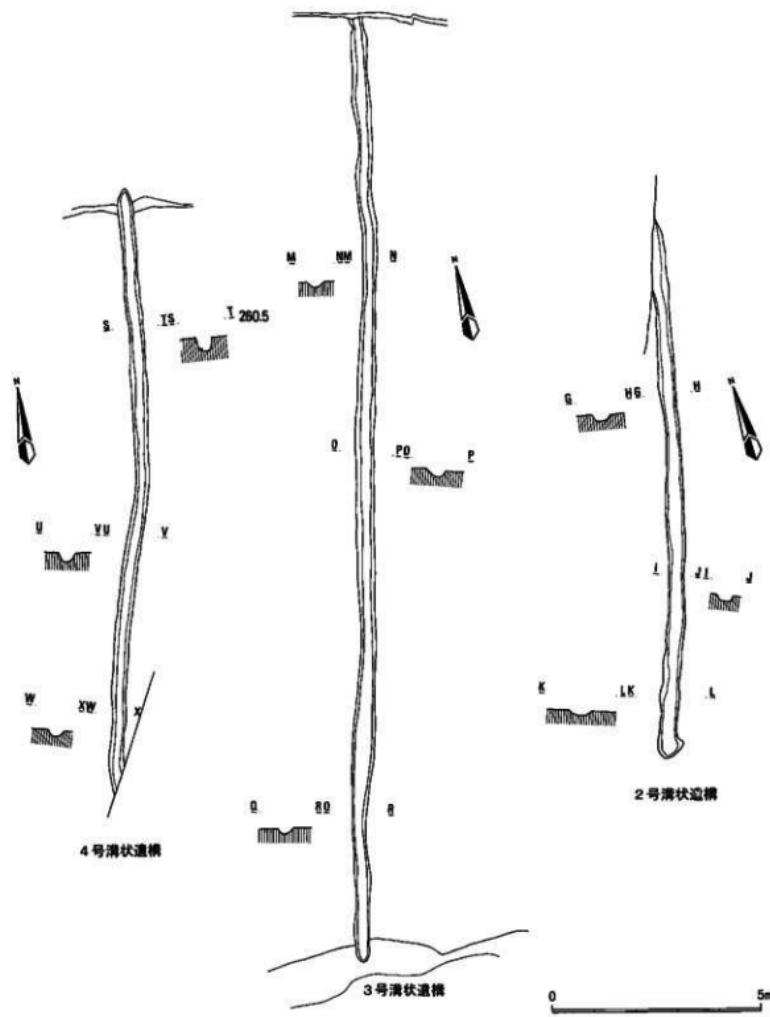
第9図 水田跡配水施設 ($S=1/60$)



第10図 2区第2面全体図 ($S=1/400$)



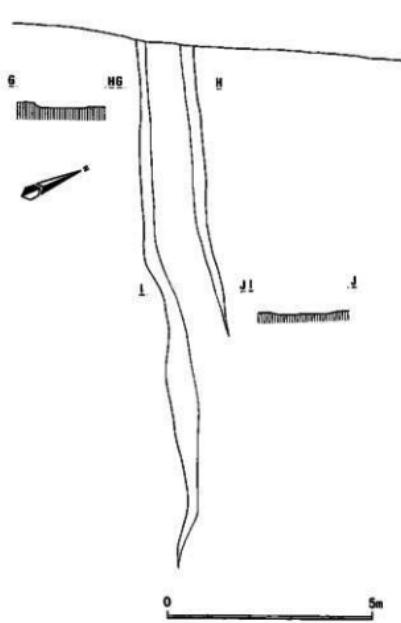
第11図 1号溝状造構 ($S=1/120$)



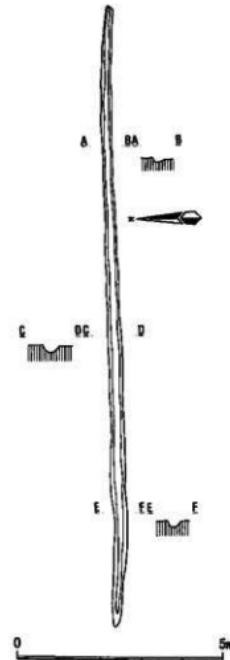
第12図 2～4号溝状造構 ($S=1/120$)

い時期のものと思われる杭列跡が確認できたが、そちらの方は残存状態が悪く、ほとんど姿を推測することもできない。これらの杭列は幅2m前後、深さ10cmほどの浅く幅の広い溝の中に造られている。杭はかなり深く打ち込まれており、調査で確認した限りでも地表に残った部分は20～30cmほどである（第11図・図版11上）。

杭列に関しては、北側の列よりも南側の方が打ち込み方の密度がはるかに大きい。北側については杭と杭の間にかなり隙間が見られる。また南側の杭列では残存状態が極めて悪く回収は



第13図 5号溝状造構 (S=1/120)



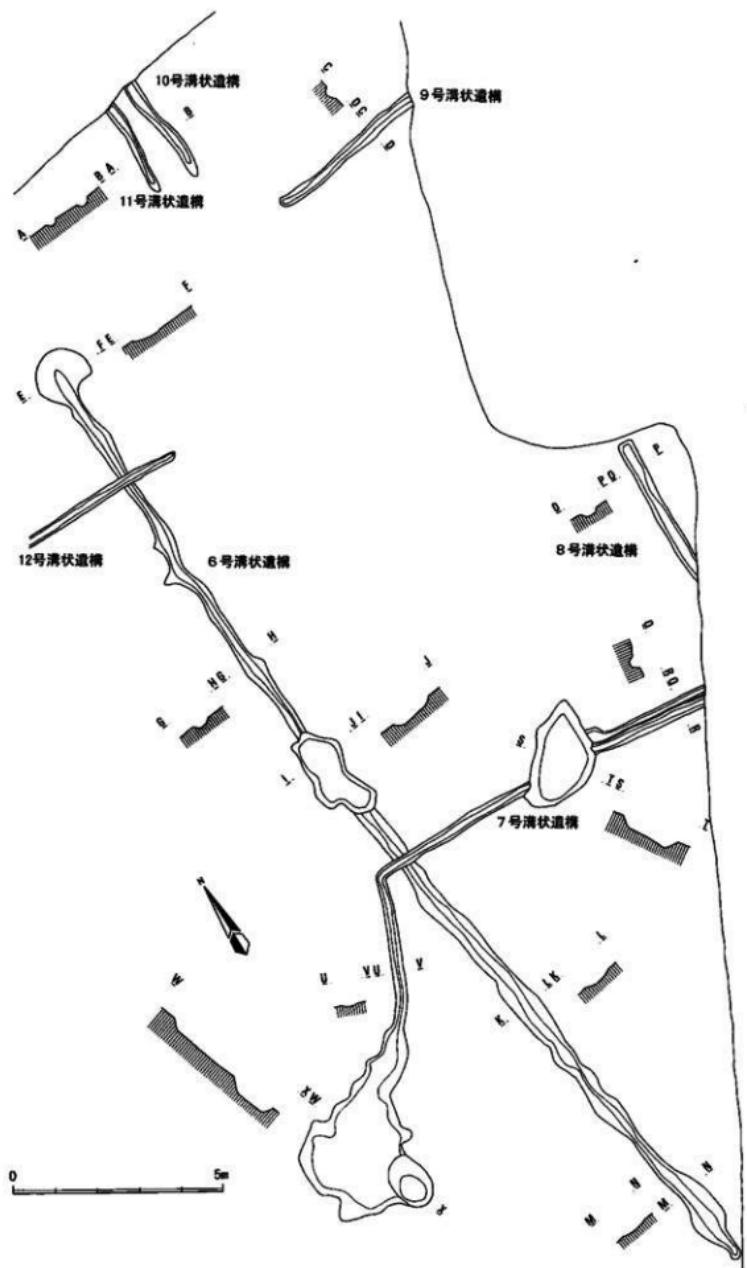
第14図 12号溝状造構 (S=1/120)

できながったが、肉眼観察で一部に『柵(シガラミ)』と思われる細い樹皮状の編み込みが杭の間に見られた。縦じて南側に関して手の込んだ作り方が行われている。東西の高低差は東側の方が約50cmほど低くなっている。丁寧な作り方から見ると杭列の間を水路として利用していたと考えるのが妥当であろう。

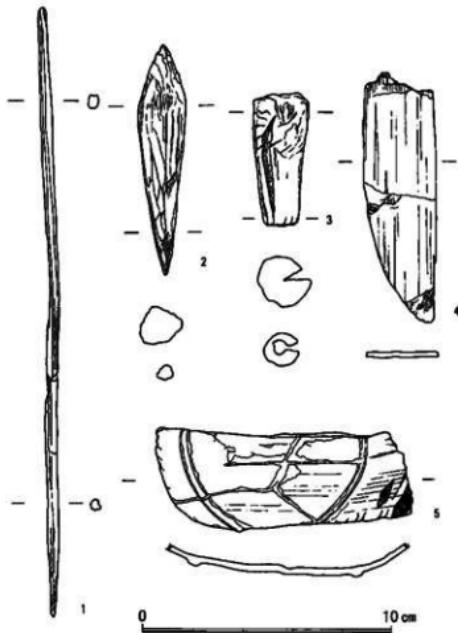
当遺構からの出土遺物は木製品(第16図)と多数の木杭である。木製品は杭列の間から出土している。1は箸。2については類例が見あたらなかった。3は樽の栓であろうか。4は曲物の底の一部と思われる。5は漆皿で内面は赤漆、外面全体には茶色がかった黒漆を施し一部(図面右端の部分)に赤漆で彩色が施されている。5以外にもう1点漆皿が出土しているが状態が悪いため図化できなかったが図版は掲載した(図版12)。木杭は多くの中から比較的状態の良いものを選んで7点ほど掲載した(第17・18図)。すべて材はヒノキである。これは同時期の甲西バイパス関連の遺跡で出土している木杭と同じ材である。長さ1m前後のヒノキの丸太を杭目の方向に細かく縦割りにした細長い木材を材料とし、その片方の端を鉛で削って尖らせたものを土に打ち込んでいる。

(2) 2号～4号溝状造構(第12図)

1号溝状造構の南に接して3本の溝状造構が確認されている。いずれも等間隔で1号にはほぼ直角に接している。幅も約40cm、深さも約20～30cmでいずれも同じ規模であり、溝の南端も2



第15図 6~11号溝状造構 ($S=1/120$)



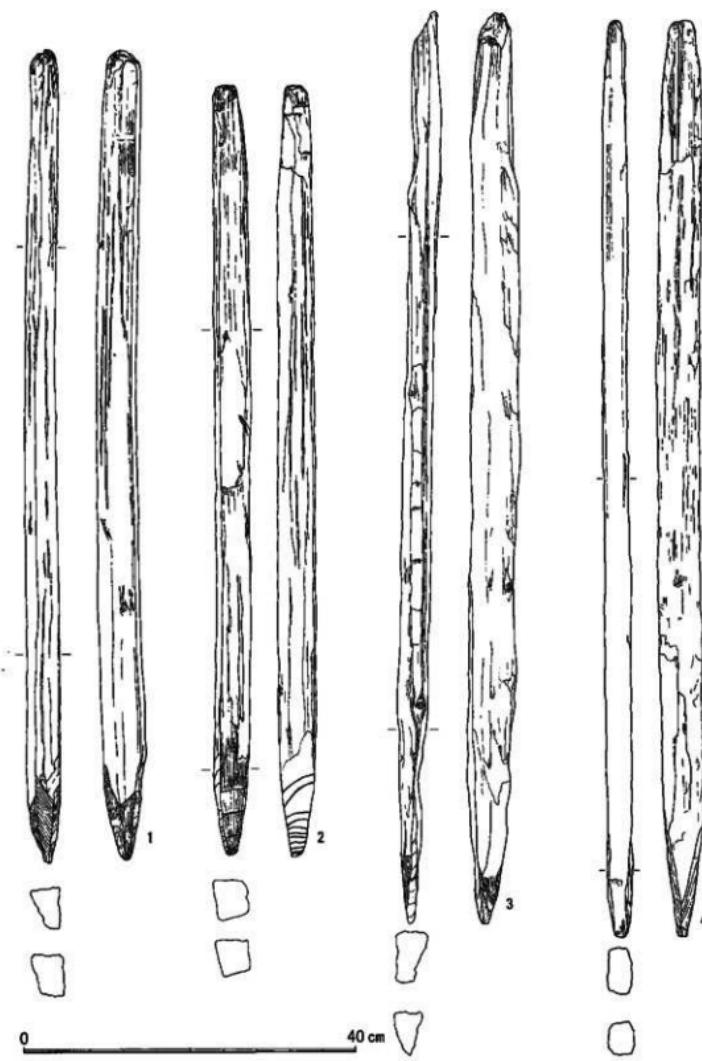
第16図 2区第2面出土木製品 ($S=1/2$)

(3) 5号～12号溝状遺構 (第13～15図)

1号溝状遺構より北に位置する5号～12号溝状遺構の中で、5号だけが1号と並行しており埋土も1号～4号と同じ暗灰色シルトであった。他の6号～12号の埋土は黒灰色シルトで、溝の走る方向も1号～4号とは異なっている。これらの溝状遺構からの出土遺物は皆無であった。

号と3号がほぼ同じ長さ（2号のみ全長がわかり約22m）で終了しているところをみると、4号も同様であろうことが推測されるだろう。1号の浅く広い溝を埋めていた土と2号～4号を埋めていた土は共に暗灰色シルトで同じものであったため、埋土および構造から見ても1号～4号は同時に存在していたものと考えて間違いないであろう。

なお1号溝状遺構より南側では所々に浅い不定型な窪地が見られる。これらは全体図には位置と形状を記してあるが、人為的な遺構とは認められなかった。また3号・4号溝状遺構はこれらの窪地の起伏に沿って掘り込まれていた（図版8上）。つまり水路のような機能では使用できなことが判明している。南北の高低差は3号の例を見てもほとんど無く、おそらく何らかの地境を示す溝であったと考えられる。これらの溝状遺構からの出土遺物は皆無であった。



第17図 1号溝状造構出土木杭(1) (S=1/6)



第18図 1号溝状造構出土木杭(2) (S=1/6)

第5章 まとめ

第1節 1区の水田跡と造営時期

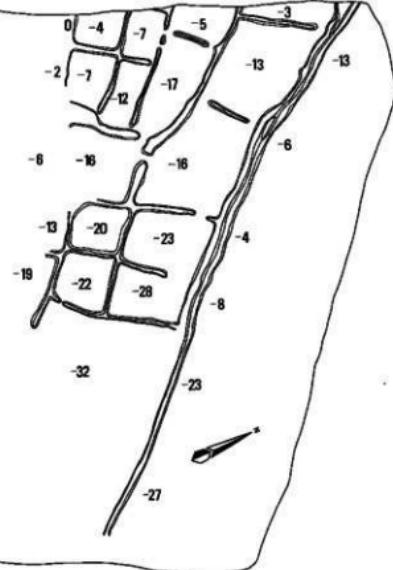
水田跡の構造について考えてみる。調査区域の外、更に北西側に水田遺構が拡がっていることは間違いない。発掘によって明らかになった範囲でどれほどの正確な判断ができるかは疑問であるが推測の強い部分も交えて考えてみよう。畦畔の残存状況もそれほど良好ではなかったし、現地でも検討を重ねたが、この水田跡からは明確に水口と考えられる施設は発見されなかつた。畦畔が切れている箇所は存在するが積極的に『人為的』と判断する材料に乏しかつた。各区画の水田面のレベル差を表示したものが第19図である。各区画の四隅とその中央部分のレベル平均値をもってその区画のレベル値とした。最も高い区画を0とし、他の区画がそれと比較して何cm低いのかを示した。各区画のレベル差を見ると、水田跡の北東側を走る土手状遺構に接している水田区画が比較的レベルが低い。もっと細かく表現すれば、発掘区域の更に北西側から水を取り入れ、そしておそらく取り入れた水はオーバーフローさせながら南東の方向の各区画へ供給していったと考えられる。溝状遺構は水路であったろうし、土手状遺構は水路の水が直接水田に流れ込むのを防いでいたものであろう。この水田跡は自然地形の広く浅い窪地を利用して造営された規模の小さい水田であったと考えられる。畦畔は水田面の土を薄く削り集めて盛ったものである。

次に水田の造営時期について検討してみよう。1区で検出された水田跡については、出土した唯一の一括土器によりその時期が特定される。

とくに特徴的なのは口唇部の繩文もしくは疑似繩文であり、県内でこれに類似した土器は甲府市幸町遺跡で出土している（甲府市史編さん委員会、1990）。しかし他に例はほとんどなく県内でも『きわめて資料が少ない』時期であるらしい（中山、1993）。本県に隣接する信濃地方では『栗林式』と呼ばれている土器群の中に多くの共通する特徴を見ることができる（佐久市教育委員会、1987）。それらから推測すれば、おおよそ弥生時代中期後半に属すると思われる土器である。そこでそれをもって1区の水田跡の造営時期としたい。

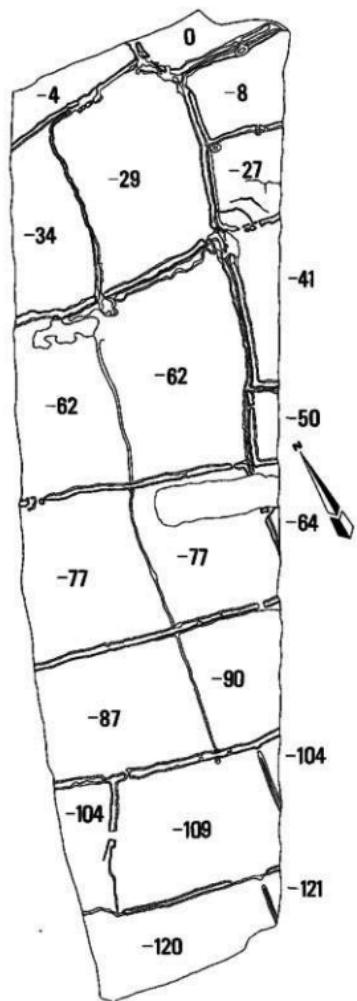
第2節 2区第1面の水田跡と造営時期

1区の場合と同様に水田跡の構造について考える。2区第1面で検出された水田跡は、基本的に一時期に營まれた一つの遺構と考えて差し支えないものであろう。ただそれぞれの水田区画の規模の大きさと比較すると発掘範囲の狭さが気にな



第19図 1区水田面のレベル差

る。つまり全貌を明らかにした区画が一つもない点が惜しまれるのである。1区の水田跡と同じように各区画のレベル差を示したのが第20図である。最もレベルの高い区画は北東隅のNo16で、ここから南西方向へ水を落としていく構造である。発掘区域から更に北東のよりレベルの高い場所に水の供給源が存在していることは間違いない。この方向には現在滝沢川が流れているが、水田跡の中で『ヌルメ』が作られている範囲が、このNo16の区画に最も近い区画のみに限られていることから考えれば、水の供給源がNo16に隣接して存在していた可能性は極めて高いものであろう。



第20図 2区第1面水田面のレベル差

次にこの水田跡の造営時期について考えてみよう。地元甲西町役場に明治20年（1887年）の当該地の水田区画の図面が存在している（第21図）。その図面と現在の水田区画とを比較すると驚くべきことに一部の水路が改良を受けているようであるが、大部分の水路も、道も、畦畔も、今と110年前とはほとんど変化していないことに気付く。発掘によって発見された水田跡は、それらとは全く異なる。唯一一致しているのは、先に水の供給源に最も近いのではないかと考察したNo16の区画のみである。これには深い意味があるのかもしれない。これらの事実から推測できることは、発見された水田跡は明治20年よりも前に造営されたものであるということ、そしてこの遺構より更に下層の2区第2面の時代性から考えると、本水田跡は江戸時代に属する可能性が高いであろう。

第3節 2区第2面の遺構と造営時期

2区第2面の遺構群は大きく2つのグループに分けられる。1号～5号溝状遺構のグループと6号～12号溝状遺構のグループである。グループ分けの理由は次の2点が上げられる。

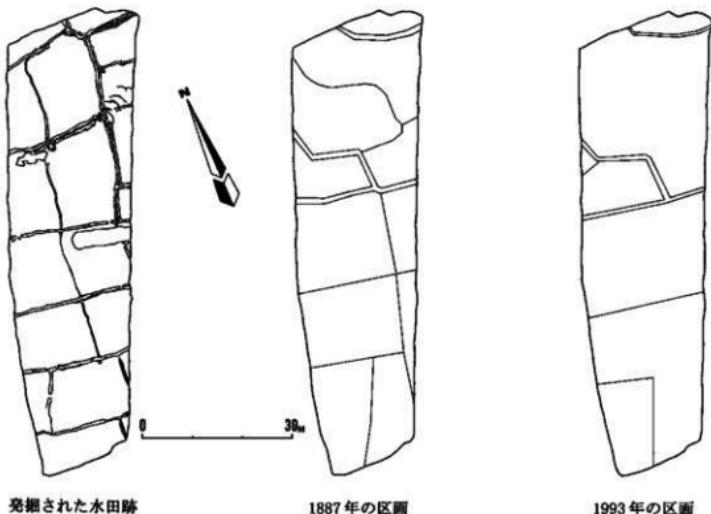
① 溝状遺構の主軸の差異

1号と5号については東西に走っているためそれらと直交する軸を出して主軸を算出した。その結果、N-5°～8.5°-Eという値が見いだせた。これに対して6号～12号は同様な方法を用いて算出すると、N-8°～13.5°-Wという値になる。

② 溝状遺構の埋土の差異

1号～5号を埋めていたのは暗灰色シルトであったが、6号～12号は黒灰色シルトであった。

この二つのグループの意味の違いとして、真っ先に考えられるのは「時期の違い」であろう。



第21図 2区第1面水田区画の変遷

「機能的な差異」についてはほとんどの溝状造構の機能が不明であるため論じても意味がないと思われる。1号のみがその丁寧な造りから水路として機能していた可能性を指摘できるだろう。2号～4号については地面の起伏に沿って掘られている点から考えても水路ではあり得ない。おそらく何らかの地境を示した溝と考えられる。6号～12号についても地境と考えることが妥当だろうか。当遺跡より1.5km南の大師東丹保遺跡（山梨県教育委員会、1994a）では複雑に直交し合う溝に対して祭祀的意味合いで解釈を試みているが、当遺跡では出土遺物が皆無なため祭祀的な解釈は積極的には主張できない。

さて2区第2面から出土している遺物はすべて1号溝状造構に関わるものである。その造営時期の決定に意味を持つ遺物は漆皿のみである。同種の漆皿は上記の大師東丹保や二本柳遺跡（山梨県教育委員会、1992）などで出土しているが、これのみをもって時期を限定することはかなり厳しいことである。13世紀後半とされる大師東丹保よりは新しい様相を示し、16世紀とされる二本柳よりは古い様相を示す。1号溝状造構の造営時期は広義な意味での『中世』の範囲と理解しておくのが無難であろう。2号～5号までは同時期と考えて差し支えないものの、6号～12号については、それ以前か、それ以後かは不明である。しかし埋没の状況等から見ると、両者にはさほどの時期的な差はないと思われる。

《参考文献》

- 甲西町 1973 「甲西町誌」
- 甲西町教育委員会 1986 「上ノ東遺跡」
- 檍形町教育委員会 1987 「木ノ久保遺跡」
- 佐久市教育委員会 1987 「北西の久保」
- 甲府市史編さん委員会 1990 「幸町遺跡」「甲府市史史料編」第一巻

- 山梨県教育委員会 1992 『二本柳遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第72集
長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅲ』
山梨県教育委員会 1993 『中川田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第77集
中山誠二 1993 『甲斐弥生土器編年の現状と課題—時間軸の設定—』 山梨県埋蔵文化財センター研究紀要 9
山梨県教育委員会 1994 a 『大師東丹保遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第86集
山梨県教育委員会 1994 b 『油田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第87集
山梨県教育委員会 1994 c 『向河原遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第88集
山梨県教育委員会 1995 a 『宮沢中村遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第101集
山梨県教育委員会 1995 b 『大師東丹保遺跡 2』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第102集

第6章 自然科学分析

第1節 向河原遺跡のテフラ

1. はじめに

甲府盆地を流れる釜無川の左岸には、赤石山地前縁の巨摩山地からの大量の碎屑物が御動使川・滝沢川などの諸河川によって運搬され扇状地を形成している。向河原遺跡は、滝沢川扇状地に位置している。この付近では、粗粒堆積物、砂層・シルト、あるいは泥炭質シルトなどの河成堆積物が堆積している。本地域は、富士火山の北西に位置しており、市之瀬台地上の褐色ローム層中には、肉眼で層として確認できないものの、富士テフラの降灰の影響が長田口遺跡などで認められている（河西、1993）。1990年度の甲西バイパス関連遺跡試掘調査で若草町十日市場の県道北の分析で、地表下3.35～3.5mに挟在される黒色泥炭層中にカワゴ平軽石Kg（約2800～2900年前）に対比される軽石型（多孔質型）火山ガラスが検出された。1992年度二本柳遺跡の分析でもKgが2地点で検出されている。向河原遺跡は、二本柳遺跡よりも約1km南に位置している。そこでテフラによる地層の対比を目的として以下のテフラ分析を行った。

2. 試料および分析法

試料は、本遺跡西壁断面で各層ごとに適当な位置で採取された24点である。採取の際、粗粒で砂質の部分は避けた。分析法は、油田遺跡と同様である（河西、1997）。

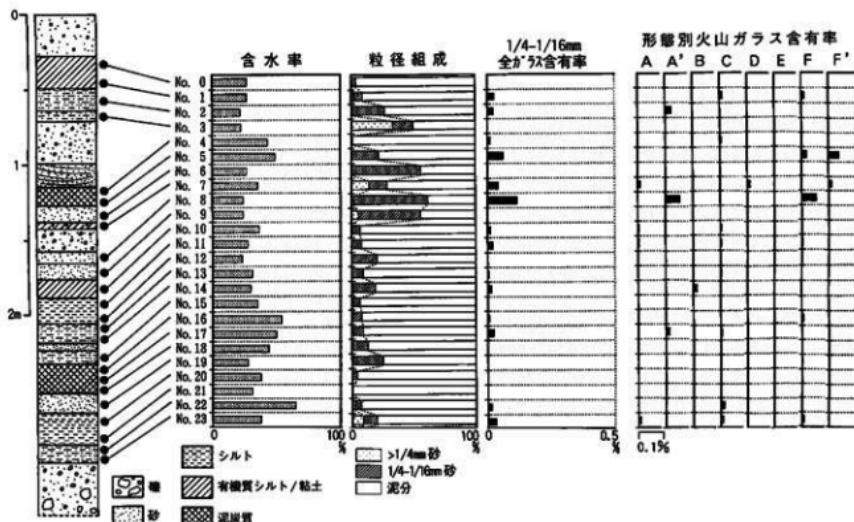
3. 分析結果

偏光顕微鏡下での計数結果を第1表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、1/4～1/16mm全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第2表に示す。なお1/4～1/16mm全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1/4～1/16mm粒径の火山ガラスの割合で表示した（注1）。特徴について以下に述べる。

水分含有率は、層ごとに変化するが、上位層の方が含水率が低く、泥炭・混炭質シルトなど

試料番号	No. 0	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20	No. 21	No. 22	No. 23
A 無色																								
A' 棕色																								
火A' 黒色		1	4		+	1												2	+	+	+	+		
A' 棕色				1																				
B 無色		+	+	1		+											1							
山B 棕色																								
C 無色	2		8	+		+	+				1	+	1	+	1	+	1					2	1	
C' 棕色											1		1											1
ガC 緑褐色																								
D 無色																								
E 無色																								
ラF 無色	2		1	1		1	+		1	+							1		+	1	+	1		1
F 棕色																								
スF 無色																								
F' 無色/黒色	1								2										+					
その他	999	996	999	1000	984	997	1000	997	998	1000	998	997	1000	999	999	1000	999	997	1000	1000	999	1000	997	997
合計	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

第1表 向河原遺跡試料中のテフラ粒子（十は計数以外の検出を示す）



第2表 向河原遺跡のテフラ

では高い傾向がある。粒径組成において、 $>1/4\text{mm}$ 粒径の砂がNo. 3で多く含まれる以外はNos. 7, 9, 23などで数%以下の含有を示す。Nos. 6, 8, 9などの砂層からの試料では $1/4\sim1/16\text{mm}$ 粒径砂分含有率が高い。 $1/4\sim1/16\text{mm}$ 全火山ガラス含有率では、No. 8 (0.12%)、No. 5 (0.06%) でやや高い傾向がある。他試料ではきわめてわずかな含有しか認められない。

火山ガラスを形態別にみると、No. 8では、A'型（バブルウォール型）とF型（多孔質軽石型）が各1個体づつ計数されている。No. 8は、砂試料であり、火山ガラス含有率が極めて低いこと、火山ガラス以外のテフラ粒子が認められることなどから、テフラの一次堆積物ではないと考えられる。

これに対しNo. 5では黒色不透明スコリアおよび黒褐色～暗褐色のややガラス質のスコリアからなるF'型が検出され、さらに新鮮なカンラン石・斜長石などのテフラ起源粒子が伴う。これら玄武岩質のスコリア石基中には斜長石微晶が認められる。新鮮な斜長石は、暗褐色ガラス質包有物を含むものと含まないものとが混在する。このNo. 5を採取した混炭層からは、弥生時代中期後半の水田址が検出されていることから、これらのスコリア質テフラは富士山弥生・古墳時代スコリア群（町田ほか、1984）に対比されると考えられる。岩相的にも層位的にも大師東丹保遺跡から出土した大師スコリアと類似性が高い。ただし弥生・古墳時代の富士火山スコリアは、類似性の高い何枚かのテフラが降灰していることから同定は慎重でなければならない。

カワゴ平軽石Kgに対比される多孔質型火山ガラスの極大は検出されなかった。

（帝京大学山梨文化財研究所 河西 学）

注1 形態x型の火山ガラスの含有率Axは、 $Ax (\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$ で算出される。ただし、B：試料の乾燥重量 (g)、C : $1/4\sim1/16\text{mm}$ 粒径砂分の重量 (g)、D : 計数した $1/4\sim1/16\text{mm}$ 粒径粒子の総数、Ex : 計数したx型火山ガラスの粒数。

文 献

- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、19-30。
- 河西学（1993）櫛形町長田口遺跡のテフラ分析。「長田口遺跡」、山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告、第82集。
- 河西学（1997）油田遺跡のテフラ。「油田遺跡」、山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告、第130集。
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ。渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、865-928。

第2節 向河原遺跡1区の古環境と稻作について

考 察

(1) 各地点の堆積環境

① 基本層序の堆積環境

最下位の砂礫の上位に堆積する粘土質シルト（試料番号25・23）の珪藻化石群集は、乾いた好気的環境に耐性のある陸生珪藻が多産することが特徴である。このことから、当時の調査地点はしばしば乾燥することもある湿地や沼沢地のような環境であったことが推定される。また、好塩生種も多産することから塩類も集積し易かったと思われる。

その上位の試料番号19・15は、珪藻化石の産出が乏しかったことから堆積環境について検討することは困難である。珪藻化石と同様な挙動を示す花粉化石が多産していることからみて、堆積速度が速いために流失した可能性は考え難く、むしろ堆積後の分解など別の要因に起因するものと思われる。

試料番号13の時灰色シルト質粘土層は、珪藻化石群集において流水環境指標種や流水生種が多産することから流水環境下で堆積した河成堆積物と考えられる。

試料番号7の褐灰色粘土質シルト層の珪藻化石群集は、流水環境指標種や流水生種が多産することから流水環境下で堆積したと考えられる。

試料番号6の時灰褐色粘土質シルト層からは、流水環境指標種や流水生種が多産することから、これらのシルト層は流水環境下で堆積した河成堆積物と考えられる。試料番号2の黒灰色シルトは、化石の産出が極めて少なく、産出種のほとんどが溶解したり破損したものであった。そのため堆積環境について検討することは困難である。

最上位の試料番号1の珪藻化石群集は、好汚濁性種や富栄養水域に一般的な種が多産すること、この他に沼沢に生育する種から構成されることから、富栄養沼沢地のような水域環境が推定される。本層が現水田耕作土であることから、現水田の水域環境を反映していると考えられる。

② 畦 畔

畦畔構成堆積物（試料番号29）の珪藻化石群集は、上記した基本層序地点の試料番号6の珪藻化石群集と類似する。試料番号6層準が水田耕土に相当することから、水田耕土を利用して畦畔を構築したことが示唆される。

③ 溝 1

溝内堆積物下部（試料番号27-2）の珪藻化石群集は、好止水性種が多産し、好流水性種を

ほとんど伴なわないことが特徴である。このことから、溝が構築された初期の頃は、溝内は流れのない滞水状態であったと推定される。

溝内堆積物上部（試料番号27-1）では好流水性種の産出率が高くなることから、溝内は流れが存在する水域となったことが窺われる。なお、好汚濁性種の産出を考慮すると水質的には富栄養であったと思われる。

④ 溝 2

試料番号1-2および2-2は、共に好流水性種の産出割合が高いことから、溝内には定常的な流れが存在したことが推定される。

灰色シルト質砂の試料番号1-4は、珪藻化石の産出が少なかったことから、堆積環境について検討することは困難である。

(2) 植物珪酸体・花粉化石からみた稻作について

栽培種のイネ属に由来する植物珪酸体は、基本層序地点では試料番号17より上位で連続して出現する。また、試料番号17層準より下位層準に構築されている溝1・溝2埋積物からも出現する。ただし、その出現率は基本層序地点の試料番号14・2・1層準以外では低率であった。試料番号14・2層準のイネ属の出現率は現水田耕土である試料番号1の出現率と同等の値を示した。

一方、花粉化石は化石の保存状態が全般に悪く、イネ属同定の根拠となる外膜の表面模様が観察できないため、基本層序地点の試料番号15・6の2層準ではわずかに検出されたが、それ以外の試料では確認することができなかった。

以上の栽培種イネ属由来の化石の産状より、基本層序の試料番号14・2層準の時期には調査区近辺で稻作が行われていた可能性が強い。これら以外の層準では出現率が低率であったことから、その可能性は低い。ただし、基本層序の試料番号6層準では畔群が検出されていることから、稻作が行われていたことは確実である。本層準で出現率が低率であった原因については、洪水による表土流失や、本水田における耕作期間が短期間であったなど、様々な可能性を考えられる。このようにイネ属の出現率が低率だからといって、近辺での稻作の存在を否定するのは問題がある。今後、重要な地形発達史、土壤の発達状況、考古学的な地域的動向などの情報を総合的に捉えて各層準を評価することが必要である。

(3) 森林植生

遺跡周辺の森林植生について木本花粉化石群集の消長に基づいて推定する。木本花粉化石群集は、現水田耕土まで急激な変化は示さず、モミ属・ツガ属・スギ属といった針葉樹の種類が卓越することが特徴である。ここでのモミ属・ツガ属の花粉化石は、随伴種の構成よりそれぞれモミとツガに由来すると考えられ、通称周辺の植生はモミ・ツガ・スギといった温帯針葉樹からなる植生であったと推定される。同様な傾向が本遺跡近辺に位置する油田遺跡（未公表）や二本柳遺跡（未公表）でも確認されており、今回の結果が本地域において普遍的な傾向を示していることが推定される。このような針葉樹が卓越する植生が成立した背景としては、気候的要因、土地的要因、土壤的要因などが関係していると考えられるが、現段階では堆積層の年代や地形発達史に関する情報が不足しているため今後の検討課題として残される。

現水田耕土の木本花粉化石群集は、マツ属複維管束亜属が高率に出現することが特徴である。これは二次林としてのマツ林の分布拡大を反映しているものと思われる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

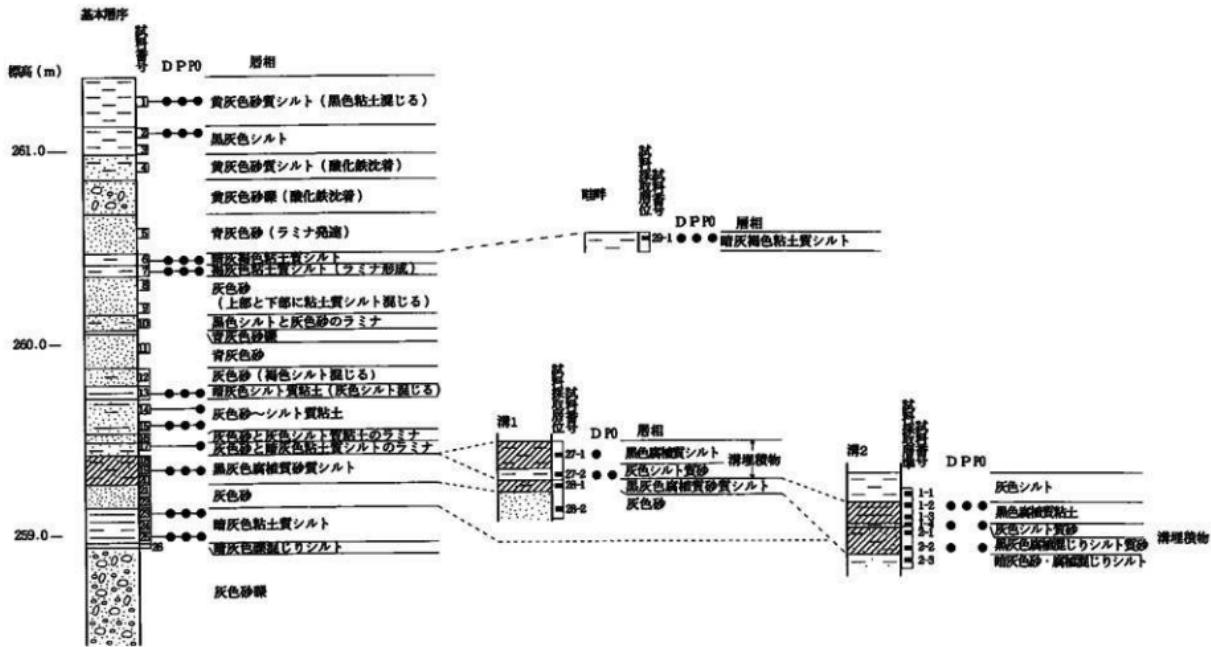


図1 調査地点の模式柱状図と試料採取標準

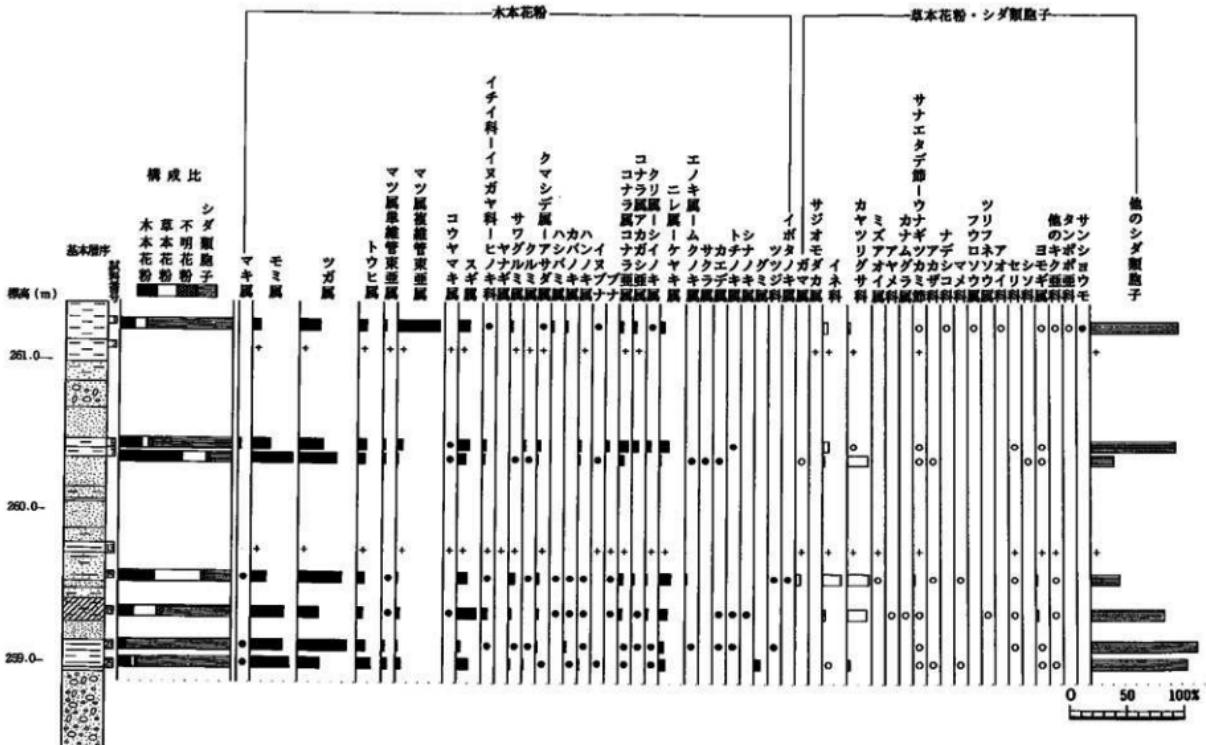


図4

基本層序の花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が地花粉・胞子数より不明花粉を除く数を基數として
百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料において出現した種類を示す。

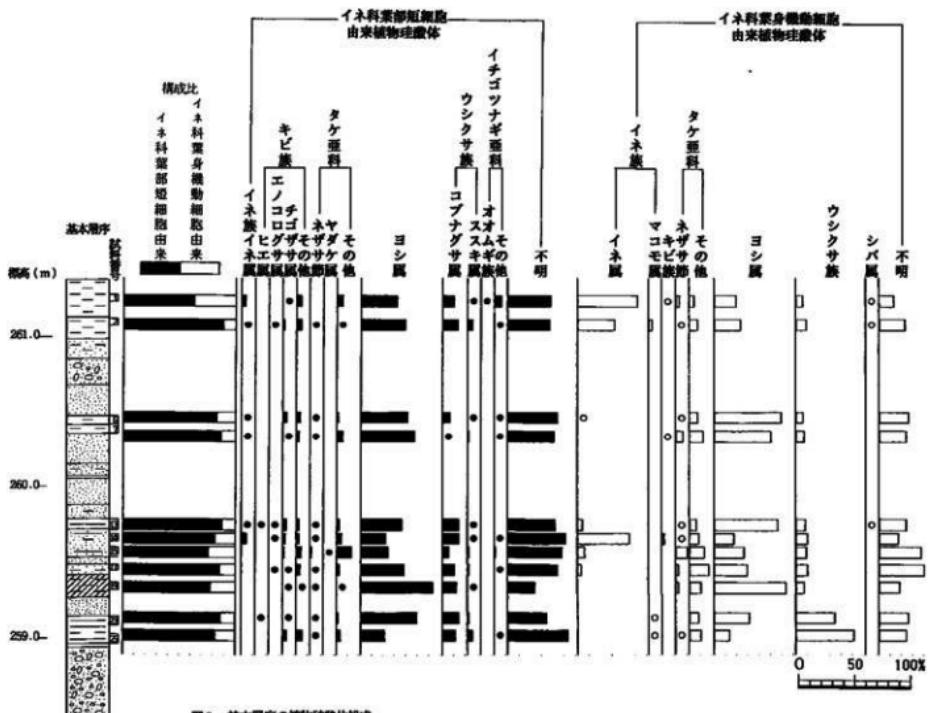


図6 基本順序の植物DNA組成

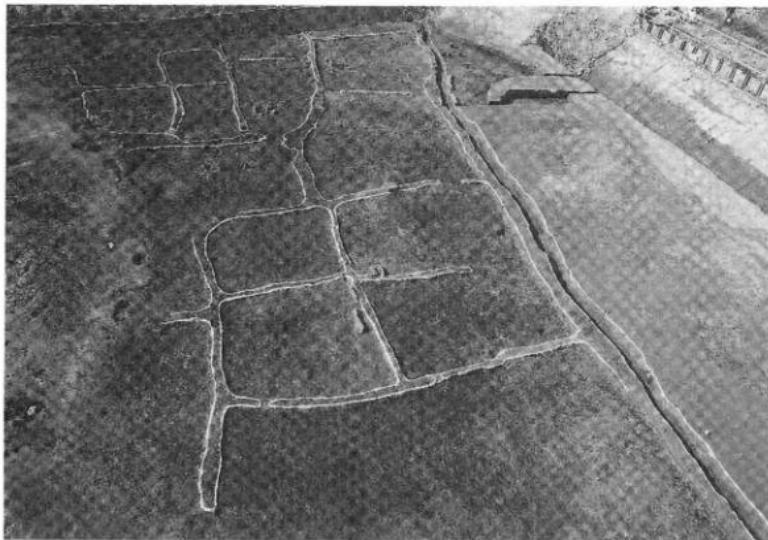
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身橿動細胞珪酸体とともにそれぞれの総数を基準として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+はイネ科葉部短細胞珪酸体については200個体、イネ科葉身橿動細胞珪酸体については100個未満の試料において検出した種類を示す。

表4 基本層序の花粉分析結果

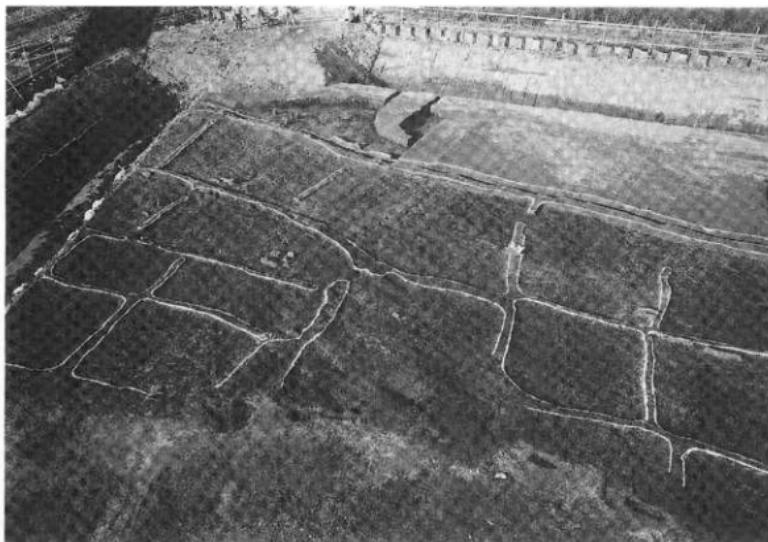
種類(Taxa)	試料番号	基本層序									
		1	2	6	7	13	15	19	23	25	
木本花粉											
マキ属	-	-	2	-	-	1	-	1	1	-	
モミ属	8	3	17	59	2	27	60	57	70		
ツガ属	20	17	22	53	11	80	36	87	40		
トウヒ属	8	2	7	10	1	12	11	15	24		
マツ属 松科	2	1	2	3	-	2	2	4	8		
マツ属 松科	40	3	5	2	1	3	7	3	8		
コウヤマキ属	-	-	1	1	2	-	2	-	-		
スギ属	11	6	11	12	19	19	34	7	21		
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	1	-	3	3	3	2	10	1	-		
ナナカマド属	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
サワグルミ属	2	1	-	1	2	11	4	1	3		
クルミ属	-	1	2	1	-	1	-	2	3		
クマシデ属—アサダ属	1	1	3	2	1	4	4	3	1		
ハシバミ属	2	-	-	-	-	2	1	-	-		
カバノキ属	2	-	-	-	-	1	2	4	2		
ハンノキ属	-	-	2	2	-	1	-	-	-		
イヌブナ	1	-	1	1	2	-	-	1	-		
ブナ	-	-	3	5	7	3	9	6	1		
コナラ属 コナラ属—コナラ属	3	1	5	-	-	4	1	1	-		
コナラ属 アカガシ属	3	1	5	-	-	3	3	4	2		
クリ属—シノキ属	1	-	4	-	-	3	-	-	-		
ニレ属—ケヤキ属	4	-	8	2	8	22	14	9	11		
エノキ属—ムクノキ属	-	-	-	1	-	3	-	1	-		
サクラ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
カエデ属	-	-	-	1	-	-	1	1	-		
トチノキ属	-	-	1	-	-	-	1	1	-		
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-		
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	10		
ソブン科	-	-	-	-	-	1	-	1	-		
イボタノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
草本花粉											
ガマ属	-	-	-	2	2	23	-	-	-	-	
サンジョモダカ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	37	11	25	3	9	101	32	-	-	12	
カヤツリグサ科	17	22	2	51	30	124	235	-	-	33	
ミズアオイ属	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	
アヤメ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
カヌムグラ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
サンエタデ節—ウナギツカミ節	8	3	1	2	2	7	2	2	1	-	
アカザ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
ナデシコ科	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マヌケ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブクロソウ属	8	-	-	-	-	-	2	-	-	1	
ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	
オトイ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科	-	-	1	-	1	2	4	1	-	-	
シンボク属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	1	-	2	1	6	7	23	1	4	-	
他のキク科属	3	-	-	-	3	1	2	-	-	-	
タンポポ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明花粉											
		9	6	21	9	19	22	67	12	41	
シダ類胞子											
サンショウモ		5	-	-	-	-	-	-	-	-	
他のシダ類胞子		644	1700	381	56	164	162	913	2719	1413	
Pseudoschizaea											
		4	5	1	2	1	5	1	-	-	
合計											
木本花粉		109	39	106	162	60	210	204	203	208	
草本花粉		81	37	31	61	55	270	302	4	53	
不明花粉		9	6	21	9	19	22	67	12	41	
シダ花粉		649	1700	381	56	164	162	913	2719	1413	
胞子		848	1782	539	288	298	664	1486	2938	1715	

図 版

図版 1

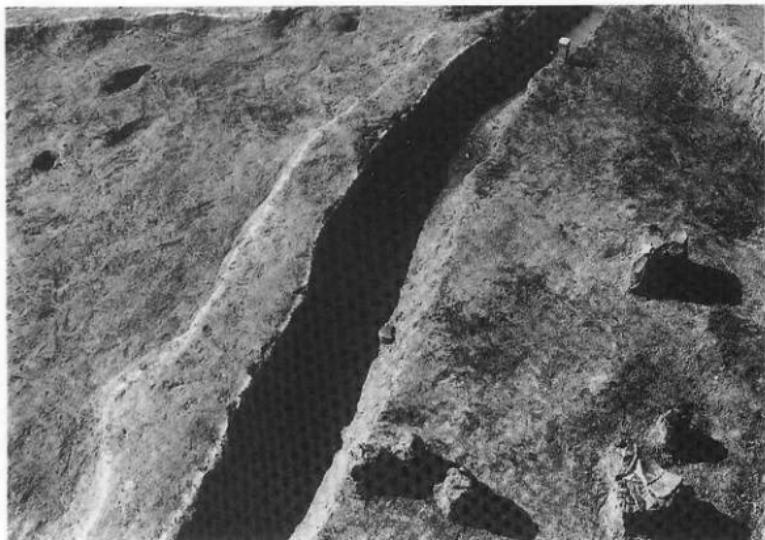


1区水田跡（東から）



1区水田跡（南から）

図版 2

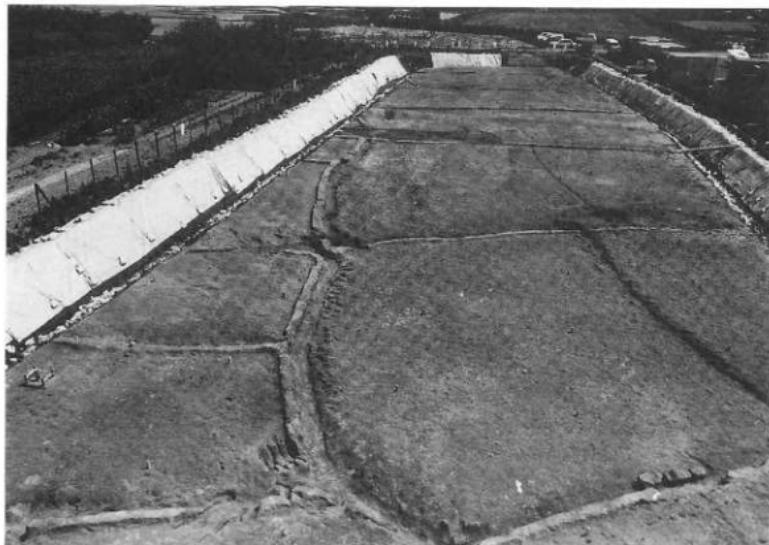


1 区水田跡土器出土状態(1)

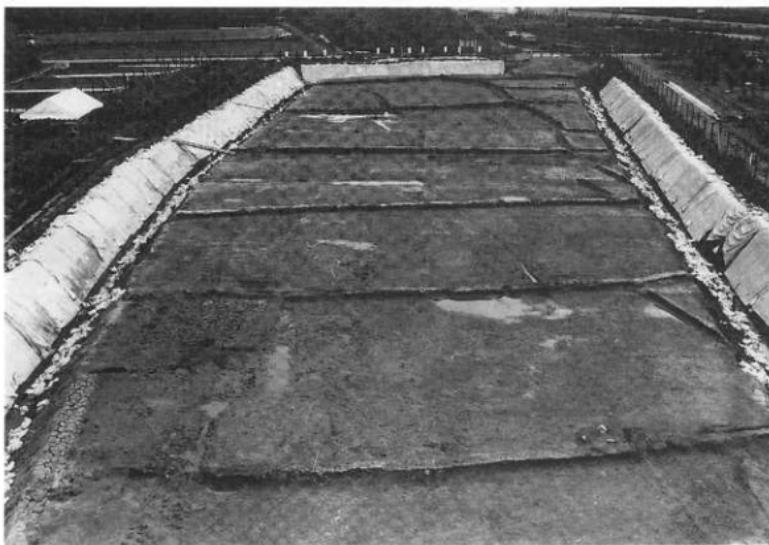


1 区水田跡土器出土状態(2)

図版 3



2区第1面水田跡（北から）

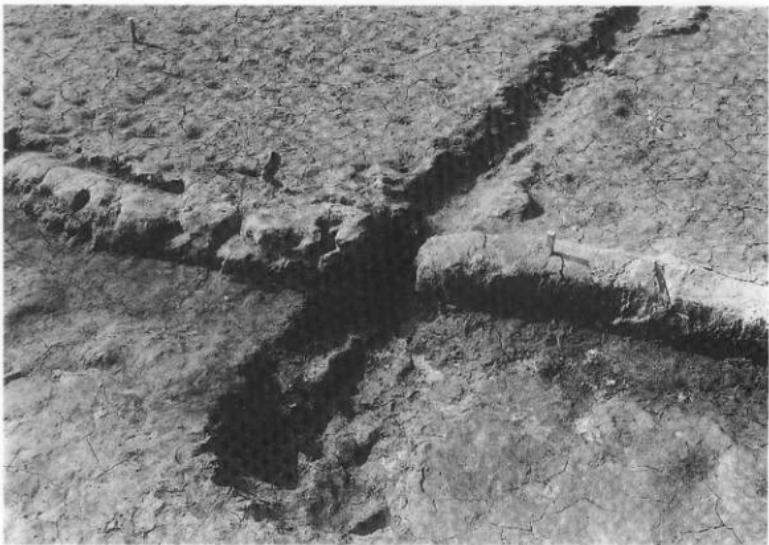


2区第1面水田跡（南から）

図版 4



2区第1面水田跡畦畔とヌルメ

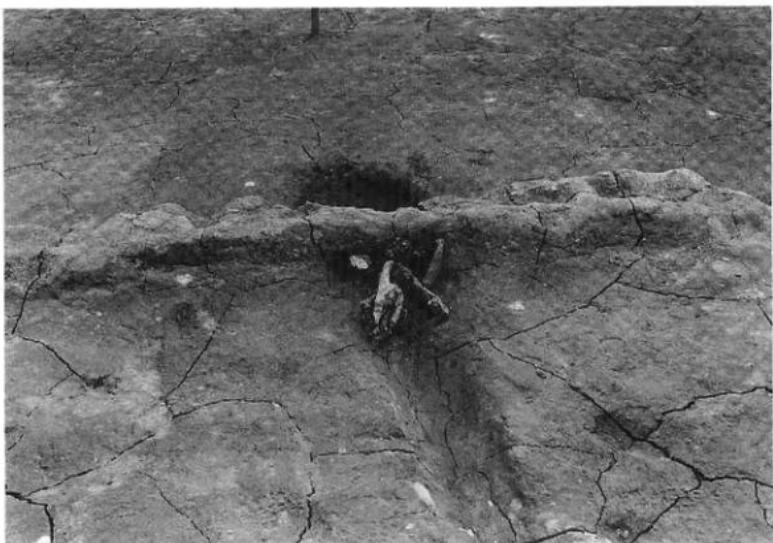


2区第1面水田跡No. 9 とNo.12の間

図版 5

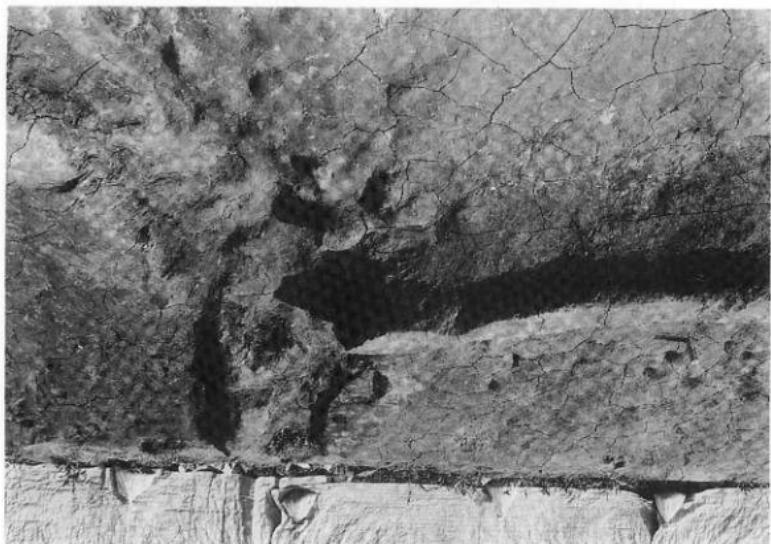


2区第1面水田跡No.4とNo.6の間（東から）

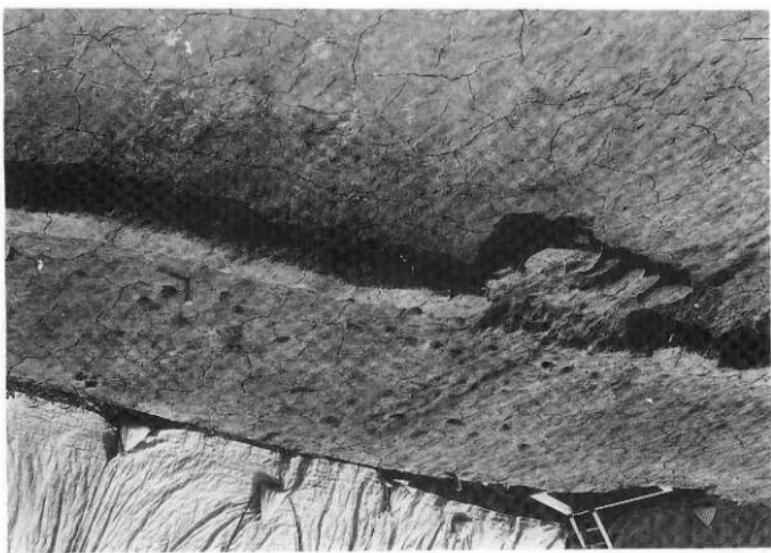


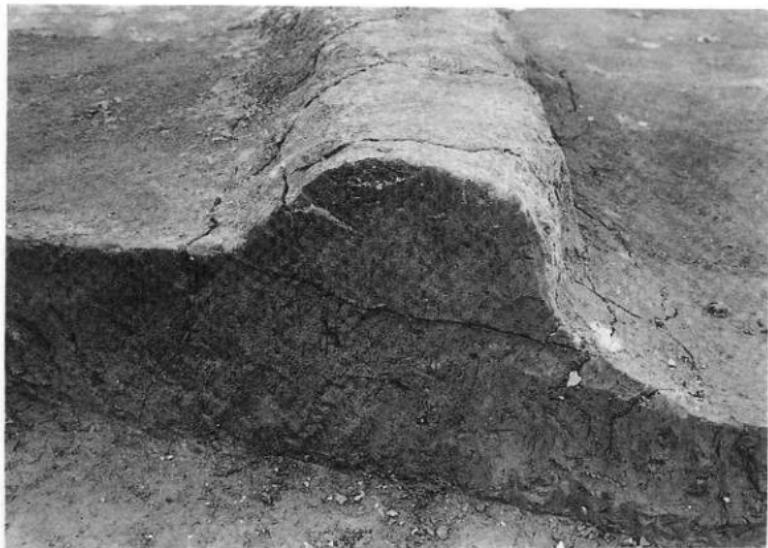
2区第1面水田跡No.4とNo.6の間（北から）

2区第1面水田跡No.15東の水口乙刈り（南力5）



2区第1面水田跡No.12乙No.15の間（落力丸疊）





2区第1面水田跡畦畔断面（No. 6とNo. 7の間）

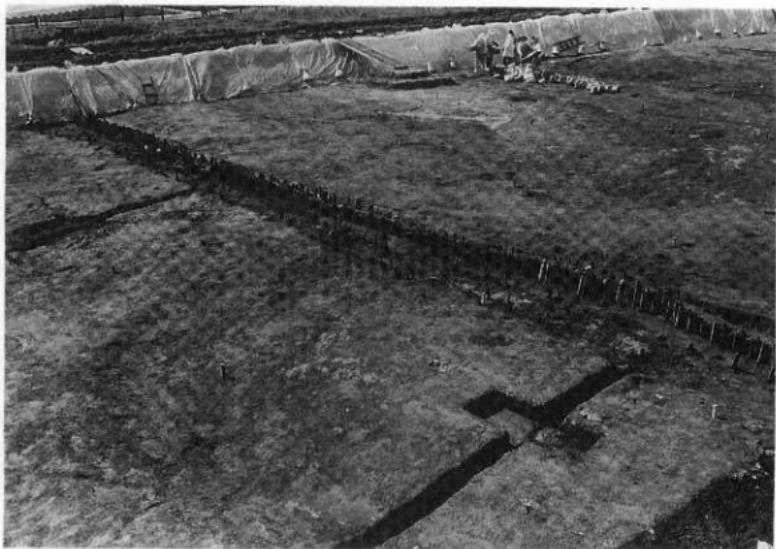


2区第1面作業風景

図版 8

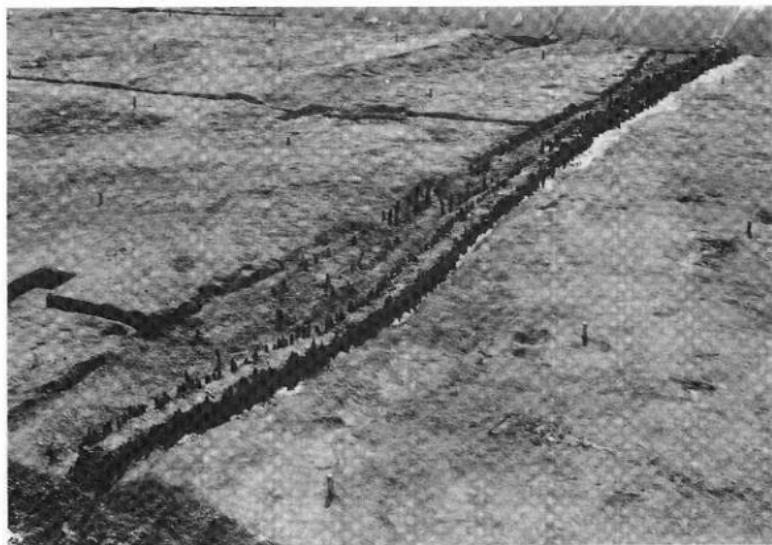


2区第2面遺構群（南西から）



2区第2面1号溝状遺構（南東から）

図版 9

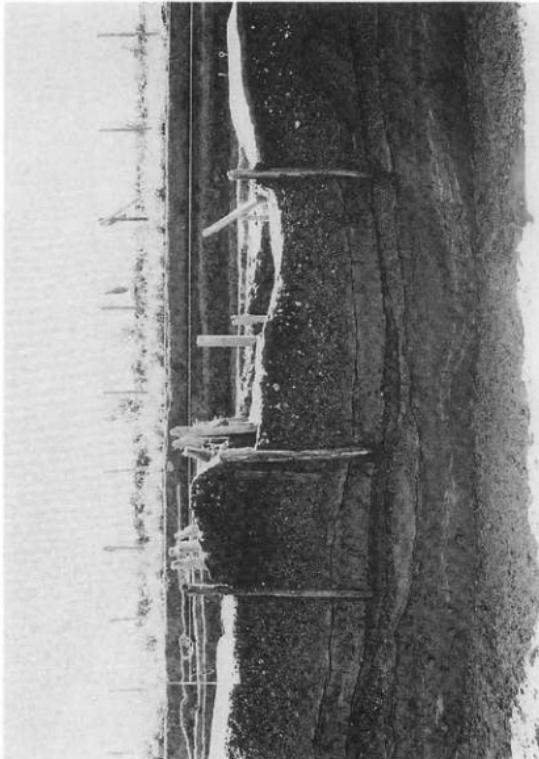


2区第2面1号溝状遺構（北東から）



2区第2面溝状遺構（東から）

図版10



2区第2面1号溝状遺構断面（西から）



2区第2面1号溝状遺構断面（東から）

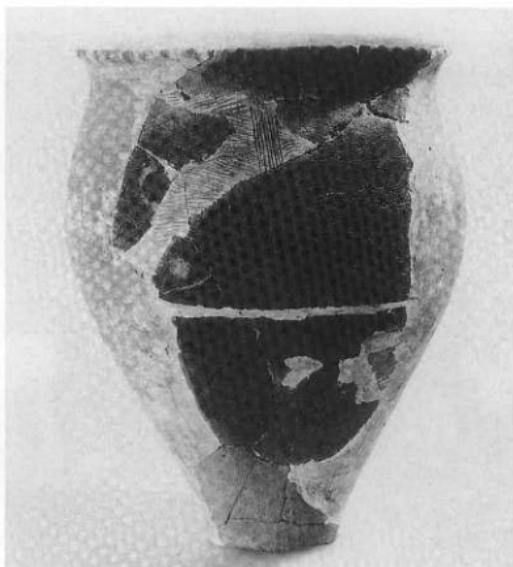


2区第2面1号溝状構杭列（南から）

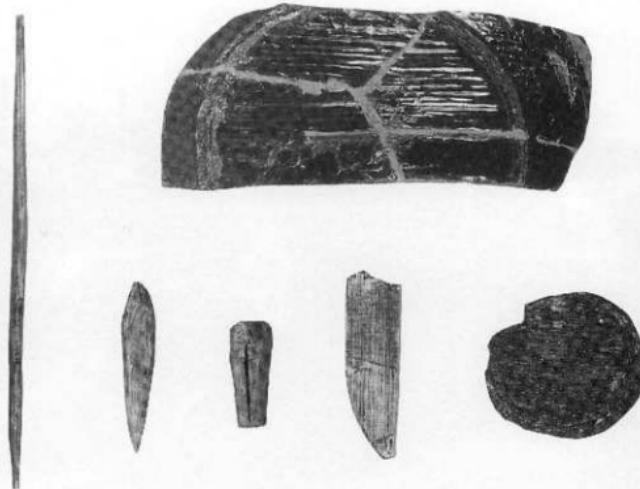


2区東断面実測風景

図版12



1区水田跡出土土器



2区第2面出土木製品

報告書概要

フリガナ	ムカガワライセキ		
書名	向河原遺跡		
副題	一般国道52号（甲西道路）改築工事および中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第129集		
著者名	米田明訓		
発行者	山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京第二建設局		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3016		
印刷所	株式会社 ヨネヤ		
印刷日・発行日	平成9年3月22日・平成9年3月30日		
向河原遺跡	所在地	山梨県中巨摩郡甲西町江原	
	25000分の1 地名・位置・標高	小笠原	北緯 35°35'48" 東経 138°28'23" 標高260m
概要	主な時代	中世・近世	
	主な遺構	水田跡・溝跡・水路跡	
	主な遺物	木製品、漆器、弥生土器、木杭	
	特殊遺物	なし	
	特殊遺構	なし	
	調査期間	平成4年9月21日～12月23日・平成5年4月14日～8月31日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第129集

1997年3月22日 印刷

1997年3月30日 発行

向河原遺跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター
 山梨県東八代郡中道町下曾根923
 TEL 0552-66-3016
 発行 山梨県教育委員会
 建設省甲府工事事務所
 日本道路公団東京第二建設局
 印刷 株式会社 ヨネヤ

